# 第1章 東日本大震災を忘れない

副読本
6～9ページ

年　　組　　番　氏名

**1** 東日本大震災では多くの厳しい教訓とすべきことがありました。それらの教訓は，しっかりと後世に伝えていかなければなりません。その中で，あなたが伝えていきたい教訓を調べ，それを後世に語り継いでいくためにできることを考え，話し合いましょう。

| あなたが伝えていく教訓 |
| --- |
| |

教訓とすべきと思った理由

あなたができること

## 東日本大震災を経験して

東日本大震災から３年という月日が経ったが，あの時のことは今でも鮮明に覚えている。地震発生の時，私は友人と食事をしていた。今まで経験したことのない大きな揺れに，私を含め飲食店にいた人々は，パニックに陥っていた。やっとの思いで飲食店を出て，急いで自宅へ向かったが，この時はまだ，それほど危機感を感じておらず，数時間後に津波がきて，多くの命が失われることなど想像すらできなかった。道路が陥没していたり，ブロック塀が崩れたりしていて，普段より時間がかかって帰宅したのを覚えている。家に帰ると，家族はみんな無事で，私の帰りを待っていた。避難しようと外に出ると，道路は津波によって水が張り，だんだんと水かさが増していったので，やむを得ず近くにあった高いアパートへ避難した。だんだんと水は深くなり，私たち家族と近所の方は，そこから動けなくなってしまった。数時間もその場所にいたが，寒さが厳しかったため，腰の辺りまで水につかりながら自宅へ向かった。水はとても冷たい上，流れも速く，流されそうになりながらも，必死に水をかきわけ到着することができた。その日から，水が引くまで２階で生活することとなった。情報が絶たれ，何が起きているのかさえ分からず，不安な日々を過ごした。そして，水が引いてから外へ出てみると，言葉を失うような光景が広がっていた。瓦礫や横転した車が散乱しており，建物は流され非現実的な光景であった。私は，この時初めて，自分の置かれている状況を理解した。親戚や友人の安否が分からず，毎日，新聞の遺体情報を確認するのは，本当に辛かった。ある時，そこに友人の名前を見つけたとき，私は信じることができなかった。今まで経験したことのない悲しい感情が生まれ，涙が止まらなかった。震災は，私たちに多大な被害と悲しみを与えた。それでも，復興に向かうことができたのは，世界中からの支援やボランティアの方々の力などがあったからだと思う。私自身も，避難所となっていた高校や被災した小学校，美容院などでボランティアを行ったが，そこで暗い顔をせず前向きに頑張っている人達を見て，自分も落ち込んでいるのではなく，被災者や地元のためにできることをやろうと，前向きな気持ちになることができた。これから私たちは，東日本大震災で経験し，学んだことを伝えていかなければならないと思う。今，不自由なく生活できていることは，当たり前ではないということ，命の大切さ，助け合うことのできる人の温かさ，震災を経験した私たちにしかわからないことが，多くあると思う。私は，そういったことを伝えていくとともに，命があること，生活できていること全てに感謝して，精一杯生きていきたい。

（震災を語り継ぐ～被災地から未災地へ～：石巻西高校より）

被害を受けた女川の街